レジリエンスとグリットが対人過敏・自己優先におよぼす影響

井田　政則（立正大学心理学部）
中山　隼登（立正大学大学院心理学研究科）
小橋　眞理子（立正大学心理学部）

本研究では、レジリエンスとグリットが対人過敏・自己優先におよぼす影響について検討することを目的とした。調査対象者は、都内私立大学在籍学生413名であった。対象者は、二次元レジリエンス要因尺度（平野，2010）、日本語版グリット尺度（竹橋ら，2019）および対人過敏・自己優先尺度（村中ら，2017）質問紙に回答をした。二次元レジリエンス要因尺度は資質的レジリエンスと獲得的レジリエンスの2因子からなり、グリット尺度は興味の一貫性と努力の粘り強さ2因子で構成され、対人過敏・自己優先尺度は対人過敏傾向と自己優先志向の2因子構造であった。対象者に回答を5段階リッカートスケールで求めた。相関分析の結果、資質的レジリエンス・獲得的レジリエンスはそれぞれ努力の粘り強さとの間に比較的強い正の相関があり、また、対人過敏傾向・自己優性志向との間に負の相関があった。次いで、興味の一貫性・努力の粘り強さはそれぞれ対人過敏傾向・自己優性志向との間に弱い負の相関があった。レジリエンス、グリット、対人過敏・自己優先を潜在変数とするモデルを構築し、構造方程式モデリングにより解析をしたところ、レジリエンスは対人過敏・自己優先に負の影響をおよぼし、これを和らげることが明らかになった。また、グリットには対人過敏・自己優先に対して負の影響をおよぼす傾向があることが示された。さらに、レジリエンスとグリットの間に高い相関があることが示された。以上の結果について、臨床的な意義を踏まえ考察をおこなった。

キーワード：レジリエンス、グリット、対人過敏、自己優先

問　題

本研究では，レジリエンス(resilience)とグリット(grit)が、対人過敏・自己優先傾向にどのように影響するのかを明らかにする。

レジリエンス

人は、その人生において、私的な体験としては、掛け替えのない人との死別・離別、病気や怪我、失業、学業上の挫折、事故など、また環境的な事象としては、自然災害、原子力災害、テロや戦争、感染症など、不可避で困難な出来事に遭遇する。こういう重大な局面に対峙したときに、人はしばしばストレス状況におちいる。このストレスが強く、長く持続し、統制不可能であれば、抑うつ、バーンアウト、不安、さらにさまざまな身体症状が現れる。

現代の複雑で工業化・情報化された社会で生活する我われにとって、ストレッサーと無関係に生きることはできない。しかし、ストレッサーに遭遇したからといって、全ての人が不適応におちいるわけではない。多くの人が適応的な生活を送っていることも事実である。貧困家庭・被虐待体験・厳しい生活環境などは、子どもの発達や精神保健上のリスクとなる。しかし、これらリスクにさらされながら、良好な社会適応や発達を成し遂げる人たちがいる（e.g., 庄司，2009）。このようなストレッサーやリスクに対する反応の個人差の一つとして、この数十年、心理学・社会学・神経科学などの分野で、大いなる注目を集めてきたのが心理学的レジリエンスの概念である。

このレジリエンスはどのように定義されているのだろうか。American Psychological Association (2020)では、レジリエンスとは、「逆境、心的外傷、悲劇、脅威、あるいは家族や人間関係の諸問題、深刻な健康問題、職場や経済的なストレス要因から派生した重大なストレスに直面したときに、それにうまく適応する過程」であるとしている。さらに、レジリエンスは、必ずしも特定の人がもつパーソナリティ特性ではなく、レジリエンスには、誰でもが学習し発達させることができる行動・思考・行為が内包されているとしている。ここでは、レジリエンスを適応の過程（process of adapting）と位置づけている。また、包括的定義としてよく取りあげられるのは、Masten, Best & Garmezy（1990）の定義である。ここではレジリエンスを「困難な、あるいは脅威的な状況にもかかわらず、より良き適応をする結果が得られる過程、またはその過程を支える能力、結果である」と定

義している。ところが、レジリエンスの定義については未だ統一された見解はみられない（e.g., 佐藤・金井, 2017；Southwick, Bonanno, Masten, Panter-Brick, & Yehuda,2014）。統一的見解としてまとまらないのは、一つにはレジリエンスが、さまざまな観点からさまざまな側面について研究されているからであろう（e.g., 佐藤・金井, 2017）。ここでは、この定義に関する論議については紙幅の都合でこれ以上立ち入らずに、American Psychological Association (2020)の定義に準じ、レジリエンスとは困難な事象・逆境・リスク状況に直面してもより良き適応ができる過程とし、その検討をおこなう。

個人のレジリエンスを測定するために、国内外において、さまざまな観点から数多くの尺度が開発され広く使用されてきた（齊藤・岡安,2009；佐藤・金井, 2017）。また、国外では、これまでに開発された21のレジリエンス測定尺度をメタ統合（meta-synthesis）することによって、レジリエンス概念の再構成をおこなう試みもなされている(Wadi, Nordin, Roslan, Celina,& Yusoff, 2020)。本研究では、このように数多くある尺度のうち、平野(2010)の作成した二次元レジリエンス要因尺度(Bidimensional Resilience Scale）を用いて、レジリエンスを測定する。この尺度は、「資質的レジリエンス要因」と「獲得的レジリエンス要因」の二つの下位尺度からなる。さらに資質的レジリエンス要因には、楽観性・統御力・社交性・行動力の4つの下位因子があり、生まれつき持っている気質と関連があるということが想定されている。獲得的レジリエンス要因は、問題解決志向・自己理解・他者心理の理解の3つの下位因子によって構成され、発達し、学習していく力であることが想定されている。

筆者たちは、レジリエンスとは、単なる特性ではなく、American Psychological Association (2020)において記載されているように学習し発達していくものだという観点をとる。なぜならばこのような観点は臨床場面で有効でかつ役立つからである。この故に、本研究では、レジリエンスの獲得すなわち学習要因を測定できる二次元レジリエンス要因尺度を用いることにした。

グリット

グリットとは、ポジティブ心理学を起源とする概念であり、粘り強さ(perseverance)と情熱(passion)の2つの特性によって定義され、失敗、逆境、停滞にもかかわらず、何年にもわたって努力と関心を維持し、課題に向けて精力的に取り組むことを意味する(Duckworth, Peterson, Matthews, & Kelly,2007, pp. 1087–1088)。先行研究を概観すると、グリットは、成功や達成などとポジティブな関係があることが示されている。例えば、Duckworth & Quinn(2009)によると、グリットの高い人は、(1)高学歴で転職が少ない、(2)GPA（成績評価値）が高く、テレビ視聴時間が短い、(3)陸軍士官学校では落ちこぼれずに退学には至らない、(4)スペリング・コンテスト参加者では好成績をあげる、ということが報告されている。つまり、グリットは困難を乗り越え、長期目標を達成できるか否かについての予測因となりうる。

グリットを測定するための尺度が開発されてきた。Duckworth et al.(2007)は、上述した定義にもとづいた質問票（27項目）を作成し、ウエブサイト調査をおこない、尺度作成をおこなった。因子分析の結果、努力の粘り強さ(perseverance of effort)と興味の一貫性(consistency of interest)の2因子を抽出した。各因子はそれぞれ6項目で構成されている。また、グリットとIQとの関係は見いだされなかったが、Big Five・誠実性と高いポジティブな相関があった。また、成功や達成を予測する要因として、グリットはIQや誠実性より有効であることが示された。日本においては、竹橋・樋口・尾崎・渡辺・豊沢(2019)が、Duckworth et al .(2007)のグリット尺度12項目を用いて、日本語版グリット尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討した。因子分析の結果、日本でもDuckworth et al.(2007)同様に、努力の粘り強さと興味の一貫性の2因子構造であることが示されている。原版様に各因子6項目からなる。信頼性および妥当性が備わっていることも確認され、使用にたえうる尺度であると報告されている。そこで、本研究ではこの日本語版グリット尺度を用いる。

レジリエンスとグリット

レジリエンス、グリット両概念には、困難があったりそれが想定されたりしても目標に達するまでやり抜く力というものが内包されていると考えられる。レ

ジリエンスは、ストレスやトラウマといったネガティブなことから回復、適応する特性であり、一方グリットは、障害があってもポジティブな成功・達成をもたらす特性である。例えば、レジリエンスはウェルビーイングの予測因となり(Epstein, & Krasner, 2013)、グリットは、IQといった認知機能よりも学業成績や職業的成功の予測因となりうる(Eskreis-Winkler, Duckworth, Shulman, & Beal, 2014)。ところが先行研究をみると、両要因間の関係性を検討したものは見当たらない。また両要因を同時に独立変数に用い、ある心理的要因との関係を検討するような研究も確認できない。そこで、本研究ではこれまで明らかになっていないレジリエンス・グリット2要因間の関係性を検討する。

対人過敏・自己優先

平野（2012）は、(1)心理的敏感さと資質的・獲得的レジリエンス要因との関係を検討し、(2)心理的敏感さが心理的適応感におよぼす負の影響に対して両レジリエンスが緩衝効果を持つかどうかを検証している。その結果、心理的敏感さが高い人は資質的レジリエンスが低い傾向があること、獲得的レジリエンスは敏感さと関係がないこと、また資質的レジリエンスでは緩衝効果がみられたものの、獲得的レジリエンスではこの効果がみられなかったことが示された。そして、ストレスに感じやすいというリスクを後天的なレジリエンスでは補うことができなかったと結論づけている。この研究では、心理的敏感さを測定するために、Aron & Aron(1997)のHighly Sensitive Person Scale を使用している。Highly Sensitive Personとは、生まれつき刺激を感じる閾値が低いために、環境事象や身の回りの出来事に敏感に反応をしてしまう人である。この尺度によって、感覚処理感度(sensory processing sensitivity)の高さ、つまり環境刺激への敏感さを測ることができる。したがって、この尺度では、敏感さは、日常生活で受けるさまざまな刺激に対する反応を問う項目によって測定される。例えば、「明るい光や強いにおい、ごわごわした布地、近くのサイレンの音などにゾッとしやすい」「カフェインに敏感に反応する」「痛みにとても敏感である」等の項目が含まれている。つまり、身体の生理的反応という、いわば人の認知過程以前の感覚的な個人差を問うている。それに対して、尺度の性質上当然ではあるが、対人的な敏感さを問う項目は、「他人に左右される」以外にほとんどない。前述したように、二次元レジリエンス要因には社交性・他者心理の理解という対人的な要因が含まれている。そこで、認知過程以前の感覚的敏感さではなく、人が対人環境のなかで持つ対人的敏感さとレジリエンス要因との関連を検討することは興味深い。また、この関連が明らかになれば、臨床的にも意味があると考える。そこで、本研究では対人的敏感さと資質的・獲得的レジリエンス両要因との関係を検討する。

日本では1990年代以降、精神診断学的な「抑うつ」とは異なるいわゆる「新型うつ」という言葉がマスコミなどで取りあげられてきた。坂本・村中・山川（2014）は、この新型うつを専門的に取り扱い、心理学的に整理する枠組みとして「対人過敏・自己優先抑うつ」モデルを提唱している。村中・山川・坂本（2017）は、新型うつと関連するパーソナリティ特性として「対人過敏傾向」と「自己優先志向」をあげている。これを測定するツールとして、対人過敏・自己優先尺度(Interpersonal Sensitivity/Privileged Self Scale)を開発、作成している。この尺度では、因子分析の結果、評価への敏感さ・評価への過剰な反応・回避・被害者意識・独善・成果依存の6因子が抽出された。さらに高次因子分析により、これら6因子は、対人過敏傾向・自己優先志向の2つの高次因子にまとめられている。これら高次因子のうち、対人過敏傾向は対人的敏感さに該当すると考えられる要因である。そこで、本研究では、この尺度を用いて、レジリエンスが新型うつ特性とされる対人過敏・自己優先へおよぼす影響を調べる。

また、本研究では、先に述べたグリットが対人過敏・自己優先へおよぼす影響についても検討をする。前述したように、グリットは、学業成績・成功・達成などのいわばポジティブな要因の予測因となることが明らかになっている。これまでの文献を渉猟したところ、グリットとネガティブな要因との関係を分析した研究は見当たらない。例えば、グリットによりネガティブ要因が弱められ、それが改善されたといった研究例は確認できない。新型うつのパーソナリティ特性である対人過敏や自己優先はネガティブ要因の一つであろう。そこで、本研究ではグリットがネガティブ要因とどう関係するのかを検討するために、グリットを説明変数、対人過敏・自己優先を目的変数とす

る分析をおこなう。仮にこの関係が明らかになれば、臨床的にも意義があるものとなろう。

本研究の目的

以上を総括して、本研究の仮説モデルを構築した。それをFigure 1 に示す。この仮説モデル図にもとづき、レジリエンスとグリットが対人過敏・自己優先にどのように影響するのかを検討する。なお、図中のIPSは、対人過敏・自己優先尺度(Interpersonal Sensitivity/Privileged Self Scale：IPS)名ではなく、「対人過敏・自己優先」を意味する潜在変数名である。以下、本論文中ではこの意味でIPSを用いる。

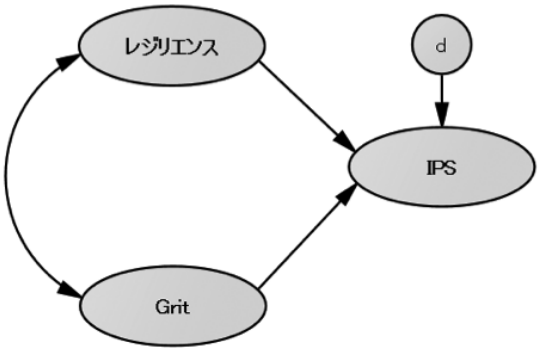


Figure 1.　仮説モデル図

方　法

調査対象者

都内私立大学に在籍する大学生470名（男性235名，女性212名，未記入23名）を対象とし、このうち回答に不備が認められるものを削除した。回答が有効であった413名（男性212名，女性200名，未記入1名：有効回答率87.9%）を分析の対象とした。平均年齢は19.5歳、標準偏差1.25歳であった。

調査実施時期および手続き

実施時期は2019年6月上旬から6月中旬。大学の講義終了後に教室において集団法による調査を実施した。対象者へ調査協力を依頼した上で、質問紙を配付し対象者の回答が終了次第ただちに回収をした。

倫理的配慮

調査実施前に研究の目的を説明し、(1)回答は無記名でおこなわれ、個人が特定されることが一切ないこと、(2)調査への参加は任意であり、いかなる場合であっても、不参加および回答中断により本人に不利益がおよばないこと、(3)回答を望まない項目については無理に回答する必要がないこと、(4)回答データは厳重に管理し、第三者がデータにアクセスすることはできないことおよび分析後ただちにデータを破棄すること、をフェイスシートの記載事項および口頭にて丁寧に説明した。紙面において調査協力への同意を得た上で、質問項目への回答を求めた。

質問紙の構成

1）二次元レジリエンス要因尺度

平野（2010）が作成した二次元レジリエンス要因尺度を用いた。この尺度は全21項目から構成される。本調査でも平野（2012）と同様に、［1：まったくあてはまらない　2：あまりあてはまらない　3：どちらともいえない　4：ややあてはまる　5：よくあてはまる］の5件法で回答を求めた。

二次元レジリエンス要因尺度は資質的レジリエンスと獲得的レジリエンスの2つの高次因子および7つの下位因子(各3項目)で構成されている。資質的レジリエンスは、楽観性・統御力・社交性・行動力の4下位因子からなり、獲得的レジリエンスは、問題解決志向・自己理解・他者心理の理解という3因子構造であった。各下位因子は次のように意味づけられている。楽観性は、将来に対して不安をもたず、肯定的な興味・期待をもって行動できること。統御力とは、もともと衝動性不安が少なく、ネガティブな感情や生理的な体調に振り回されずにコントロールできる力。社交性は、見知らぬ他者に対する不安や恐怖が少なく、他者との関わりを好み、コミュニケーションを取れること。行動力は、積極性と忍耐力によって、また目標や意欲を持ち実行できる力。問題解決志向は、状況を改善するために、問題を積極的に解決しようとする意志をもち、解決方法を学ぼうとすること。自己理解は、自分の考えや自分自身について理解・把握し、自分の特性に合った目標設定や行動ができること。他者心理の理解とは、他者の心理を認知的に理解する、もしくは受容すること、を意味する。

2) 日本語版グリット尺度

竹橋ら（2019）が作成した日本語版グリット尺度を用いた。この尺度は全12項目で構成されている。本研究でも、原尺度と同様に5件法で回答を求め、選択肢を［1：全く当てはまらない　2：あまり当てはまらない　3：少し当てはまる　4：かなり当てはまる　5：非常に当てはまる］とした。

グリット尺度は興味の一貫性と努力の粘り強さの2因子(各6項目)で構成されている。興味の一貫性とは、同じ目標に長きにわたり努力を投入する情熱に関する因子である。努力の粘り強さとは、目標に対して努力し続ける粘り強さに関する因子である。本尺度では、興味の一貫性という因子名を用いているが、項目内容は興味の一貫性のなさを測定しているため、すべての項目において逆転処理をおこなって得点化をした。

3) 対人過敏・自己優先尺度

村中ら（2017）が作成した全25項目から成る対人過敏・自己優先尺度を用いた。原尺度にしたがって［1：あてはまらない　2：ややあてはまらない　3：どちらともいえない　4：ややあてはまる　5：あてはまる］の5件法で評定するよう求めた。

対人過敏・自己優先尺度は対人過敏傾向と自己優先志向の2つの高次因子と、6つの下位因子で構成されている。対人過敏傾向は、評価への敏感さ(9項目)・評価への過剰な反応(5項目)・回避(2項目)の3下位因子からなり、自己優先志向は、被害者意識(4項目)・独善(3項目)・成果依存(2項目)の3下位因子により構成されている。各下位因子の内容は次のとおり。評価への敏感さとは、否定的評価に対する警戒心である。評価への過剰な反応は、他者からの否定的評価を受けた際の過度な反応を意味する。回避は、困難な場面や状況を回避する傾向とされる。被害者意識は、問題の所在を自己ではなく他者にあるとする傾向である。独善は、自分の考えと異なる考えの受け入れ難さとされる。成果依存は、自己評価を業績や成績など外的基準に依存する傾向といえる。

結　果

分析手法・得点化

分析にあたっては、統計パッケージIBM SPSS Statistics ver.22およびAmos ver.22を用いた。質問項目の評定値「1から5」を「1点から5点」に得点換算し、逆転項目は数値転換させた上で、各尺度の合計得点を項目数によって除した値を尺度得点とした。なお、先述したとおりグリットの下位尺度・興味の一貫性を構成するすべての項目に対して逆転処理を施した。

項目分析

二次元レジリエンス要因尺度，グリット尺度，対人過敏・自己優先尺度の各質問項目について基本統計量を算出した（基本統計量の結果については掲載を省く）。この基本統計量をもとに項目分析をおこなった。その結果、対人過敏・自己優先尺度の項目「私の周りには意地悪な人が多いと思う」の平均値が2.07、標準偏差が1.08であったため、床効果を示した。ただし、この床効果を示す数値は.99であり、1.00を僅かに.01だけ下回ったものであった。そこで、この項目が含まれる下位尺度（被害者意識）の項目数を確保するために、得点化においてこの項目も使用することにした。その他のすべての項目においては床効果も天井効果も見られなかった。したがって、全ての項目のデータを用いて分析をおこなう。

下位因子の基本統計量および信頼性係数

各下位因子得点の基本統計量と信頼性係数（Cronbachのα）をTable 1に掲載した。各得点の平均値は2.31～3.77の範囲を示し、それに対応する標準偏差は.69～1.01の間の値であった。Cronbachのα係数をみると、「楽観性・社交性・行動力・他者心理の理解」、「興味の一貫性・努力の粘り強さ」、「評価への敏感さ・評価への過剰な反応・被害者意識」の因子においては、その値が.71～.88と十分な高さの値を示し内的整合性が確認された。その他の因子については、その値が.32～.68と十分な高さの値とはいえない。特に「自己理解」因子の値は.32であり、その内的整合性が保証されているとはいいがたい。

Table 1　各下位因子の基本統計量およびCronbachのα係数

尺度	二次元レジリエンス要因尺度							グリット尺度		対人過敏・自己優先尺度					
下位因子	資質的レジリエンス要因				獲得的レジリエンス要因			興味の一貫性	努力の粘り強さ	対人過敏傾向			自己優先志向		
	楽観性	統御力	社交性	行動力	問題解決志向	自己理解	他者心理の理解			評価への敏感さ	評価への過剰な反応	回避	被害者意識	独善	成果依存
平均値	3.47	3.10	2.98	3.31	3.38	3.33	3.77	2.71	2.92	3.42	3.40	3.14	2.31	2.85	2.58
標準偏差	.89	.87	1.01	.91	.78	.69	.79	.70	.75	.91	.93	.93	.84	.89	1.01
中央値	3.67	3.00	3.00	3.33	3.33	3.33	4.00	2.83	3.00	3.56	3.40	3.00	2.25	3.00	2.50
最小値	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
最大値	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	4.50	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00
Cronbachのα係数	.81	.55	.86	.74	.60	.32	.71	.74	.81	.88	.86	.64	.75	.68	.62
項目数	3	3	3	3	3	3	3	6	6	9	5	2	4	3	2

n=143

相関分析

各尺度の下位因子間のピアソンの相関係数を算出し、Table 2に示した(注)。二次元レジリエンス要因尺度・資質的レジリエンスの4下位因子（楽観性・統御力・社交性・行動力）は、グリット尺度・努力の粘り強さと中程度から高い正の相関（.369～.711）示し、さらには，対人過敏・自己優先尺度のほぼ全ての下位因子と負の相関を示した。すなわち、資質的レジリエンス要因は努力の粘り強さと正の関係を示し、対人過敏・自己優先尺度の下位因子とは負の関係があることが示された。獲得的レジリエンス３要因も、努力の粘り強さと正の関係があり、対人過敏・自己優先尺度のほぼすべての下位因子とは負の関係があることが示された。なお、行動力と興味の一貫性との間に正の相関が見いだされた。次に、グリット各因子と対人過敏・自己優先因子との関連を検討すると、興味の一貫性も努力の粘り強さも対人過敏傾向および自己優先志向との間に負の関連が見いだされた。すなわち、概ね、資質的レジリエンス・獲得的レジリエンスと努力の粘り強さとの間には正の関係があり、これら２レジリエンスと対人過敏・自己優先との間には負の関係があることが示唆される。

Table 2　下位因子間の相関係数（r）

尺度	二次元レジリエンス要因尺度							グリット尺度		対人過敏・自己優先尺度					
下位因子	資質的レジリエンス要因				獲得的レジリエンス要因			興味の一貫性	努力の粘り強さ	対人過敏傾向			自己優先志向		
	楽観性	統御力	社交性	行動力	問題解決志向	自己理解	他者心理の理解			評価への敏感さ	評価への過剰な反応	回避	被害者意識	独善	成果依存
楽観性	1.000	.488**	.477**	.397**	.395**	.314**	.428**	-.031	.369**	-.303**	-.380**	-.353**	-.262**	-.177**	-.193**
統御力		1.000	.363**	.556**	.324**	.262**	.421**	.111*	.436**	-.349**	-.440**	-.405**	-.158**	-.357**	-.092
社交性			1.000	.327**	.415**	.292**	.386**	.030	.425**	-.243**	-.340**	-.387**	-.153**	-.239**	-.183**
行動力				1.000	.382**	.246**	.373**	.331**	.711**	-.250**	-.267**	-.539**	-.110*	-.198**	-.063
問題解決志向					1.000	.333**	.384**	-.051	.374**	-.093	-.124*	-.384**	-.157**	-.108*	-.086
自己理解						1.000	.416**	.139**	.282**	-.252**	-.237**	-.205**	-.180**	-.182**	-.155**
他者心理の理解							1.000	.012	.372**	-.075	-.142**	-.243**	-.226**	-.233**	-.242**
興味の一貫性								1.000	.220**	-.293**	-.220**	-.225**	-.134**	-.218**	-.094
努力の粘り強さ									1.000	-.311**	-.293**	-.582**	-.049	-.159**	-.106*
評価への敏感さ										1.000	.732**	.389**	.239**	.436**	.165**
評価への過剰な反応											1.000	.430**	.246**	.469**	.253**
回避												1.000	.172**	.262**	.179**
被害者意識													1.000	.456**	.262**
独善														1.000	.233**
成果依存															1.000

n=143　**p < .01,　* p < .05

仮説モデルの検討

Figure 1に提示した仮説モデルにしたがって，まず、Appendixに示すモデルを作成した。各尺度の下位因子得点を観測変数にし、Appendixの図に示した潜在変数を設定した。その際に、レジリエンスとIPSに関しては2次因子分析データを用いて、モデルを構築した。このモデルについて構造方程式モデリングにより解析を試みた。しかしながら、推定値や適合度の算出はできたものの誤差分散の一つが負の値を示し不適解となり、モデルに問題があることが分かった。

そこで、新たなモデルを作成し分析をすることにした。今回も仮説モデル（Figure 1）に示した因果の方向をふまえ、新たなモデルを設定した。それをFigure 2 に示す。このモデル設定にあたって意図した点は次のとおりである。Table 1に示したように各尺度の下位因子レベルでは、いくつかの因子（統御力・問題解決志向・自己理解・回避・独善・成果依存）においてそのα係数の値が低く、内的整合性があるとは言えない。これは，統計的には因子を構成する項目数が少ないことによると考えられる。あるいは対象者が特殊な学生集団であったためではないかとの想定も可能であるが、いずれにせよ尺度として問題含みであろう。そこで、新たなモデルでは、資質的レジリエンス・獲得的レジリエンス、興味の一貫性・努力の粘り強さ、対人敏感傾向・自己優先志向のそれぞれに含まれる項目の総合得点を観測変数に設定した。これにより内的整合性は保証される。まず、モデルで扱う観測変数の基本統計量・信頼性係数および相関分析の結果を示す（それぞれTable 3, Table 4）。各因子の合計得点を項目数で除したものを得点とした。Table 3に示したように各因子の平均値（標準偏差）は、2.55〜3.49（.58〜.81）であった。また、各因子のα係数は、.72〜.93と高い値を示し、各因子において内的整合性が十分あると判断できる。

相関分析の結果（Table 4）をみてみると、(1)レジリエンス尺度内相関では、質的レジリエンスー獲得的レジリエンス間に比較的高い正の相関がみられ（.615）、(2)グリット尺度内では興味の一貫性ー努力の粘り強さ間に低い正の相関があり(.220)、(3)対人過敏・自己優先尺度内では対人過敏傾向ー自己優先志向間に比較的高い正の相関がみられた(.432)。レジリエンス各因子ーグリット各因子間では、(1)努力の粘り強さと資質的レジリエンス・獲得的レジリエンスとの間に、比較的高い正の相関が見いだされた(それぞれ.640, .451)。それに対して、(2)興味の一貫性はどちらのレジリエンスとも関係がみられなかった。つまり、グリットと二次元レジリエンス間に正の相関があるが，それはグリット・努力の粘り強さとの関係においてである。ちなみに、グリット総合得点と二次元レジリエンス総合得点との相関係数を算出してみると、r = .486 であり中程度の正の相関が見られる。対人過敏・自己優先、グリット、レジリエンス各因子間相関では、(1)対人過敏傾向は、レジリエンス2因子およびグリット2因子との間に負の相関が見いだされた（-.242〜-.486）。一方、(2)自己優先志向は、レジリエンス2因子と低い負の相関がみられたが(-.324, -307)、グリット2因子との間にはほとんど相関がなかった。すなわち、対人過敏傾向はレジリエンスおよびグリットと負の関係があり、自己優先志向はレジリエンスと負の関係があるといえよう。

Table 3　各因子の基本統計量およびCronbachのα係数

尺度	二次元レジリエンス要因尺度		グリット尺度		対人過敏・自己優先尺度	
因子	資質的レジリエンス	獲得的レジリエンス	興味の一貫性	努力の粘り強さ	対人過敏傾向	自己優先志向
平均値	3.22	3.49	2.71	2.92	3.38	2.55
標準偏差	.70	.58	.70	.75	.81	.67
中央値	3.25	3.56	2.83	3.00	3.44	2.56
最小値	1.00	1.33	1.00	1.00	1.00	1.00
最大値	5.00	5.00	4.50	5.00	5.00	4.44
Cronbachのα係数	.85	.72	.74	.81	.93	.77
項目数	12	9	6	6	16	9

n =143

Table 4　因子間相関係数（r）

尺度	二次元レジリエンス要因尺度		グリット尺度		対人過敏・自己優先尺度	
因子	資質的レジリエンス	獲得的レジリエンス	興味の一貫性	努力の粘り強さ	対人過敏傾向	自己優先志向
資質的レジリエンス	1.000	.615**	.144**	.640**	−.486**	−.324**
獲得的レジリエンス		1.000	.038	.451**	−.242**	−.307**
興味の一貫性			1.000	.220**	−.297**	−.201**
努力の粘り強さ				1.000	−.386**	−.132**
対人過敏傾向					1.000	.432**
自己優先志向						1.000

n=143　　**p < .01

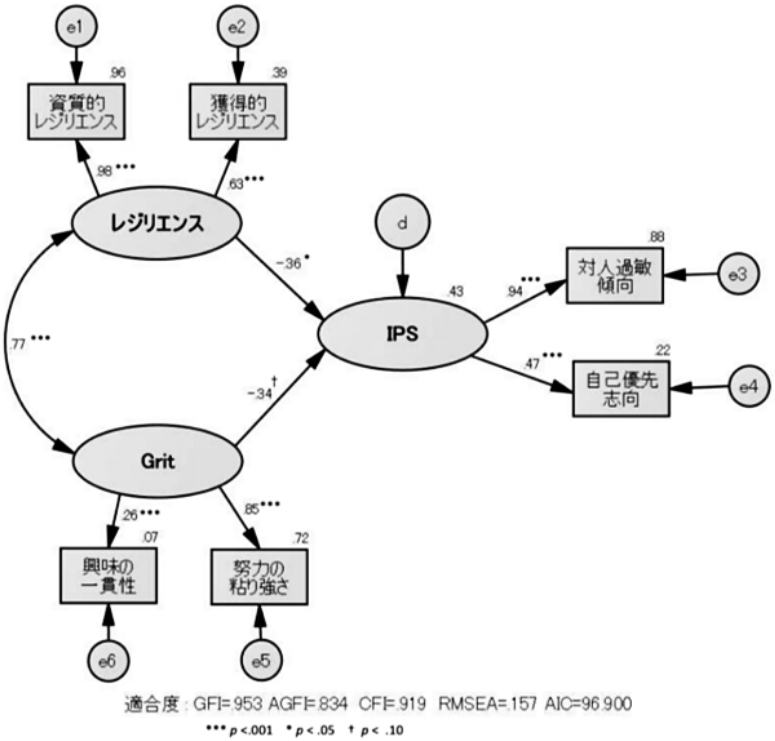


Figure 2.　構造方程式モデリングによる分析結果

構造方程式モデリングにより分析した結果をFigure 2 に示す。モデルの適合度指標はGFI=.953；AGFI=.834；CFI=.919；RMSEA=.157 であり、GFIとCFIの両指標は .900を超えており十分な値を示している。AGFIは若干低く、またRMSEAは .05を上回っている。このRMSEA適合度は許容範囲を超えているが、GFI・CFIの十分な値からモデルのあてはまりの良さは保証でき、また本モデルは実質科学的な観点からすると臨床上役立つ果実の多いモデルであると想定されよう。これらのことから本モデルを採用することにする。パス係数は標準化推定値である。レジリエンスから対人過敏・自己優先（IPS）へのパス係数は-.36(p < .05)と有意であり、レジリエンスが対人過敏・自己優先に負の影響を与え、それを和らげるということが示された。グリット（Grit）から対人過敏・自己優先へのパス係数は -.34(p < .10)と有意傾向を示した。有意ではないが、グリットも対人過敏・自己優先に負の影響を与えるのではないかということが示唆された。すなわち、グリットも対人過敏・自己優先を弱めるのではないだろうか。レジリエンスとグリット間に相関関係が示され(.77, p < .001)、両構成概念間に高い関連性がある。なお、構成概念から観測変数に対する影響度指数は、興味への一貫性への指数が.26と低いが、全ての指数が有意(p < .001)であり、構成概念と観測変数は適切に対応しているといえる。

考　察

本研究の目的は、Figure 1 に示したモデルにしたがって、レジリエンスおよびグリットが対人過敏・自己優先におよぼす効果を検証することであった。構築したモデルを構造方程式モデリングによって分析した結果、レジリエンスは対人過敏・自己優先に対して負の影響があり、これを弱める効果があることが明らかになった。このことは、石毛・無藤(2006)やLosel , Bliesener & Koferl (1989)など、レジリエンスが精神的な健康に寄与するといういくつかの先行研究と一致する結果といえる。また，有意なパス係数の値ではなかったが(p = .065)、グリットも対人過敏・自己優先に負の影響をおよぼし、これを和らげる傾向があることが示された。

レジリエンスが、新型うつのパーソナリティ特性とされる対人過敏・自己優先に対して影響があるという知見は、臨床心理学的にも意義があることだと考える。新型うつを抱える人に適切な働きかけやプログラムを用いてレジリエンスを獲得させることができれば、新型うつからの解放につながるからである。したがって、レジリエンスは、必ずしも特定の人がもつ固定的なパーソナリティ特性ではなく、誰もが学習し発達させることができる行動や思考であるという観点は重要である。

また、グリットも対人過敏・自己優先というネガティブな側面を和らげるのに効果があるのではないかという結果は、これまでのグリット研究にもう一つの枠組みを与えることになるだろう。ポジティブな要因との関係を明らかにするためになされてきたグリット研究ではあるが、ネガティブな要因との関連が明らかになれば、その研究の幅が広がることになりグリット概念の汎用性も高まる。最近のグリットに関わる研究を調べてみると、例えば、異分野である行動経済学でも、労働生産向上のための議論のなかで新たな視点としてグリットが取りあげられている（川西・田村，2019）。このようにグリットの汎用性は他分野にもおよんでいるのである。

本研究の目的の一つは、レジリエンスとグリットとの関係を検討することでもあった。結果で述べたように、レジリエンスとグリットとの総合得点での相関は中程度の正の関係(r = .486)が見いだされた。またFigure 2 のモデル分析図に示したように両要因間には正の関係（.77）がみられる。またこの図にあるように両要因とも対人過敏・自己優先に負の影響をおよぼしていることから、両要因にはなにか共通するものがその根底にあると考えられる。現時点のデータだけでは、それが何かは明確には言及できないが、両尺度因子間の相関を検討してみよう。Table 4 に示されているように、資質的レジリエンスは、努力の粘り強さとやや高い相関(r = .640)を示しているが、興味の一貫性とはほぼ相関がみられない。獲得的レジリエンスも努力の粘り強さと中程度の相関(r = .451)を示すが、この相関係数の値は資質的レジリエンス－努力の粘り強さ間の相関より低い。また、獲得的レジリエンスも興味の一貫性とは無相関である。すなわち、努力の粘り強さ要因がキーとなっていると考えられる。そこで、Table 2 に掲載した各下位因子間の相関分析の結果をみてみると、努力の粘り強さは、資質的レジリエンス・行動力と高い相関(r = .711)があり、両者の関係性は強い。また、努力粘り強さは、二次元レジリエンス全ての因子と正の相関を示す。すなわち、資質的な行動力をはじめとする要因がその共通基盤にあるのではないだろか。ただ、このデータだけではこれ以上の検討ができない。今後、この点を明らかにするデータ収集が必要となろう。

次に、本研究の限界について述べる。この論文では、モデル図に示したようにレジリエンス、グリット、対人過敏・自己優先の３つを構成概念として設定し、各構成概念2因子ずつを観測変数とし各因子の合成得点を用いて分析をおこなった。いわば、大きな枠組みのモデル構築をおこなった。このため、構成概念を支える下位因子レベルの分析はなされていない。つまり、説明変数である二次元レジリエンスの８下位因子（楽観性～他者心理の理解）およびグリット２因子と、目的変数である対人過敏・自己優先との間の因果関係の分析はなされていない。臨床的にも、応用的にも、これら因子のうちどのような因子が目的変数に影響をおよぼしているかを明らかにすることは必要であろう。今後、本研究で提示したモデルを継承しながら、この点を明らかにしていく。

（注）本論文では、相関係数の値は有意差がみられても　$r \leqq |.20|$（小数第3位を四捨五入）の場合には「ほとんど相関が無い」「無相関」と解釈する。

引用文献

American Psychological Association. (2020). Building your resilience . Washington, DC: American Psychological Association. Retrieved from https://www.apa.org/topics/resilience(November 25, 2020)

Aron, E, N., & Aron, A. (1997). Sensory-processing sensitivity and its relation to introversion and emotionality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 345-368.

Duckworth, A. L., Peterson, C., Matthews, M. D., & Kelly, D. R. (2007). Grit: Perseverance and passion for long-term goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 1087–1101.

Duckworth, A. L., & Quinn, P. D. (2009). Development and validation of the Short Grit Scale (Grit-S). *Journal of Personality Assessment*, 91, 166-174.

Epstein, R.M., & Krasner, M.S. (2013). Physician resilience: What it means, why it matters, and how to promote it. *Academic Medicine*, 88, 301-303.

Eskreis-Winkler, L., Duckworth, A. L., Shulman, E., & Beal, S. (2014). The grit effect: Predicting retention in the military, the workplace, school and marriage. *Frontiers in Personality Science and Individual Differences*, 5(36). doi: https://doi.org/10.3389/fpsyg.2014.00036

平野　真理 (2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み―二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の作成　パーソナリティ研究, 19, 94-106.

平野　真理 (2012). 心理的敏感さに対するレジリエンスの緩衝効果の検討―もともとの「弱さ」を後天的に補えるか―　教育心理学研究, 60, 343-354.

石毛　みどり・無藤　隆 (2006). 中学生のレジリエンスとパーソナリティとの関連　パーソナリティ研究, 14, 266–280.

川西 諭・田村 輝之(2019).　グリット研究とマインドセット研究の行動経済学的な含意―労働生産性向上の議論への新しい視点―　行動経済学, 12, 87-104.

Losel, F., Bliesener, T., & Koferl, P. (1989). On the concept of invulnerability: Evaluation and first results of the Bielefeld project. In M. Brambring, F. Losel, & H. Skowronek (Eds.), *Children at risk : Assessment, longitudinal research, and intervention*. New York: Walter de Gruyter. pp.186-219.

Masten, A.S., Best, K.M., & Garmezy, N. (1990). Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. *Development and Psychopathology*, 2, 425-444.

村中 昌紀・山川 樹・坂本 真士 (2017). 対人過敏・自己優先尺度の作成―「新型うつ」の心理学的特徴の測定　心理学研究, 87, 622-632.

齊藤　和貴・岡安　孝弘(2009). 最近のレジリエンス研究の動向と課題 明治大学心理社会学研究 4, 72-84.

坂本 真士・村中 昌紀・山川 樹 (2014) . 臨床社会心理学における“自己”：「新型うつ」への考察を通して　心理学評論, 57, 405–429.

佐藤　暁子・金井　篤子(2017). レジリエンス研究の動向・課題・展望　―変化するレジリエンス概念の活用に向けて―　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, 64, 111―117.

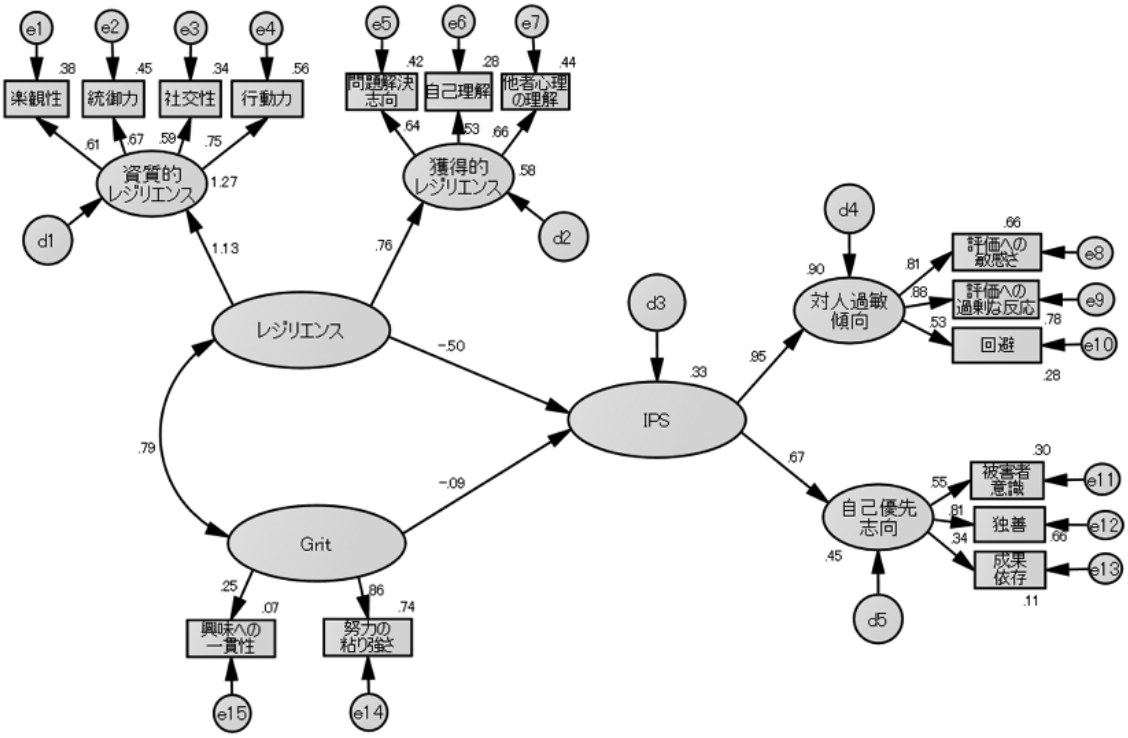
庄司 順一(2009). リジリエンスについて　人間福祉学研究, 2, 35-47.

Southwick, S. M., Bonanno, G. A., Masten, A. S., Panter-Brick, C., & Yehuda, R. (2014). Resilience definitions, theory, and challenges: Interdisciplinary perspectives. *European Journal of Psychotraumatology*, 5,25338, doi: https://doi.org/10.3402/ejpt.v5.25338

竹橋　洋毅・樋口　収・尾崎　由佳・渡辺　匠・豊沢　純子 (2019). 日本語版グリット尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 89, 580-590.

Wadi, M.M., Nordin, N.I., Roslan, N.S., Celina, T., & Yusoff, M.S.B. (2020). Reframing resilience concept: Insights from a meta-synthesis of 21 resilience scales. *Education in Medicine Journal*, 12. 3–23.

Appendix



適合度：GFI=.841 AGFI=.773 CFI=.772 RMSEA=.121 AIC=664.829

Figure　モデル図および構造方程式モデリングによる分析結果

付記

本研究は、立正大学心理学研究所からの2020年度研究助成を受けて実施された。

Influence of resilience and grit on interpersonal sensitivity/privileged self

Masanori IDA（*Rissho University*）
Hayato NAKAYAMA（*Rissho University*）
Mariko KOBASHI（*Rissho University*）

The study aims to examine the influence of resilience and grit on interpersonal sensitivity/privileged self. The study recruited 413 students from a private university in Tokyo. The participants completed the Bidimensional Resilience Scale (composed of two factors, namely, innate and acquired resilience; Hirano, 2010), the Japanese version of the Grit Scale (made up of two factors, namely, consistency of interest and perseverance of effort; Takehasi et al., 2019) and the Interpersonal Sensitivity/Privileged Self Scale (comprising two factors, namely, interpersonal sensitivity and privileged self; Muranaka et al., 2017). The result of correlation analysis indicated a relatively strong positive correlation between innate and acquired resilience with perseverance of effort. However, a negative correlation was noted between both types of resilience and interpersonal sensitivity/privileged self. Furthermore, consistency of interest and perseverance of effort exhibited a weak negative correlation with interpersonal sensitivity/privileged self. The study constructed a causal model with resilience, grit, and interpersonal sensitivity/privileged self as the latent variables and used structural equation modeling for analysis. In summary, the study elucidated that resilience exerts a negative effect on interpersonal sensitivity/privileged self. Moreover, grit tends to exert a negative effect on interpersonal sensitivity/privileged self, whereas a strong positive correlation was observed between resilience and grit. The results were discussed based on their clinical significance.

Key words : resilience, grit, interpersonal sensitivity, privileged self

—2020.12.11 受稿 , 2021.1.16 受理—